

周年によせて

お遍路と宇宙の目的

2012.4~2020.3 学長 八耳 俊文
教養学科・現代教養学科在籍

昨年（2023年）四国八十八箇所を巡礼した。1番札所からはじめ88番札所まで順にたどっていく順打ちである。出発のときは途中で挫折となるのか完遂できるのか見当もなかったが、毎日ひたすら歩き続け、無事結願を迎えられた。このあと1番札所まで歩くと四国一周が完成する。二日を費やしこれを達成すると、最後に近くの鳴門市賀川豊彦記念館を訪れた。お遍路と賀川豊彦の組み合わせは一般でないかもしれないが、両方とも私にとっては大事であった。

それは短大の学長室の壁に賀川豊彦の色紙が掛けられており、毎日、これを見ながら仕事をしてきたからである。自然と賀川豊彦への関心が湧き起こった。このことについては同窓会会報第42春号に小文を書いたことがある。そこでも取りあげたが、彼の著作『宇宙の目的』は長らく気になっていた。賀川は終生、自然のしくみに、さらにはそのしくみの背後に潜む宇宙の意志の存在に考えをめぐらしていた。

宇宙は進化発展しているというのが賀川の結論であった。東西冷戦の中、核兵器使用の危険性が高まる中、人類絶滅の可能性にふれながら、そのあとに進化は続くか書いた。お遍路をしているとき、私は「お遍路さん」とよばれた。また時代を超えてかつてのお遍路さんと一緒に歩いているとの感覚も持った。

賀川は宇宙に存在する、宇宙で生きることの意味を問い続けた。この答えは容易ではない。お遍路を通じ、名前もなく一つの時代に固定されない自分を考えた。延長すると宇宙につながる。この自分観は私にとっては新鮮で大きな実りであった。

恵みを受け渡ししていく歩み

青山学院大学コミュニケーション人間科学部教授
2020.4~2022.10 学長 河見 誠
家政学科・現代教養学科在籍

短大同窓会は親睦、母校への寄与に加えて、「社会貢献」「学習活動」を柱として立ち上げられました。母校の短大則第一条（目的）に結びつく、「愛と奉仕に生きる」実践としての社会貢献、そして女性の生き方の「語り場」により「覚醒した自立的な心」を養う生涯教育を、50年にわたり活発に展開し続けてきたことは極めてユニークであり、日本の教育史に刻まれ、未来に向けて学ばれるべき歩みであります。心よりの敬意と祝意を表します。

全国さらには海外にも及ぶ生き生きとしたこの同窓会活動は、しかし卒業生一人ひとりの地に足のついた、「覚醒した自立的な心」をもった「愛と奉仕に生きる」日常の歩みの上にこそあるということを、短大の女子教育の伝統を受け継いだ大学ジェンダー研究センターの短大卒業生聞き取り調査を通して教えられています。

今私は在外研究で米国滞在していますが、この機会を用いて、イリノイ州のモリス、シャナハン等を訪ねました。ドーラ・E・スクーンメーカーはシャナハンで宣教の決意を固め、モリスで教師となつて備える中で日本への宣教へと導かれていきます。その場に立つと、150年前の20歳前後のドーラの「愛と奉仕に生きる」決意、与えられた使命を凜として見つめた「覚醒した自立的な心」が具体的に伝わってきて、感動とともに祈りを捧げました。それは私たちがドーラから「受け継いだ」ものへの感謝、そしてそれを次に「受け渡していく」決意の祈りです。50周年を契機に、短大同窓会が益々躍動し、与えられた恵みを「受け渡ししていく」歩みを、たゆまず続けていかれることを期待し、祈ります。

同窓会設立50周年を祝して

青山学院大学コミュニケーション人間科学部教授
英文学科・現代教養学科在籍 松村 伸一

同窓会設立50周年、まことにおめでとうございます。私ごとですが、1993年4月に英文学科に着任した後、2012年から学科改編に伴い、現代教養学科国際専攻の所属となりました。2019年に短期大学から退き、その後相模原キャンパスの学院大学コミュニケーション人間科学部に主に英語科目を担当しています。

同窓会との関りでは、英文学科会の講座で現代イギリス女性作家の短編小説や、ルイス・キャロル作品を扱いました。また、学科改編後は国際専攻主任、その後、現代教養学科主任として地方支部活動の一端に関わる機会もいただきました。講座では、参加者の皆さんが普段の授業で接する学生たち以上に熱心に耳を傾けてくださるのに気を良くして、つい長話が過ぎてしまい、どれも尻切れトンボになってしまったのは申し訳ない限りです。

また、四県すべての四国支部総会に順繰りに参加し、温かく迎えていただいたのは今も楽しい思い出です。最後に参加した東北支部の総会は盛岡開催、こちらも個人的な思い入れのある地で、感慨深い再訪でした。

講座でも支部総会でも、自分が皆さんに与えた物よりはるかに大きなものをいただきました。改めて感謝いたします。青山学院女子短期大学で学んだというほか、直接のつながりはなくとも、同じ共同体に属し、学びや愉しみを共有できる場があるのは本当に貴重なことです。今後私自身を含めた「元短大教員」らが老いて学院を去った後、同窓会活動も曲がり角を迎えざるを得ないと拝察しますが、皆さんの知恵と勇気でこの貴重な場が守られることを心より願っています。